

長期宿泊体験活動検討委員会 第2回 議事要旨

○日 時：令和2年2月10日（月）午後3時30分～午後5時

○場 所：教育委員会室

○参加者：委員長、委員12名、事務局3名 計16名

1 開会

- ・資料の確認

2 委員自己紹介

- ・前回欠席委員挨拶

3 議事

(委員長)

- ・まず初めに、前回の検討委員会で出された成果と課題について確認したい。

(事務局) 説明

- (1) 第一回委員会で出された成果と課題の確認
- (2) 第三回以降の予定

(委員長)

- ・今回の第二回委員会では、まず初めに第一回委員会で意見を出しきれなかったプレセカンドスクールの成果と課題について、意見や感想を交えて出していきたい。

(委員A)

- ・今まで武蔵野市や町田市などで宿泊学習を経験してきた。プレセカンドスクールは、ほうとうづくりや、ハイキング、富士山に関する学習などを行っている。私の経験から言うと、プレセカンドスクールは、オーソドックスな移動教室の形をしている。
- ・プレセカンドスクールは、初めての宿泊行事ということで非常に意味がある。プレセカンドスクール実施要綱を見ても、第1条(4) ¹⁾に関して一番意識を持って計画を立てている。5年生のセカンドスクールにつなげるために、どのような学びが必要なのか考えて計画することが重要。
- ・プレセカンドスクールは、初めての宿泊行事なので、安心安全に行う上で、分宿はちょっと厳しい。また、共通体験の場としても意味があるのではないかな。
- ・来年からは、武蔵野市民科との関連を考えなければいけない。武蔵野市民科は、小学校5年生から中学校3年生までだが、小学校5年生からいきなり始まるのではなくて、小学校1年生からの流れの中でやっていく必要がある。
- ・私の学校だと、児童数が増えているので、今の場所のできるのはあと2年くらいだと思う。安全性の確保や、他の学校との兼ね合いもあるので、検討には時間を要する。今から考えなくてはいけない。
- ・宿泊数については何とも言えない。(日数の短い) プレセカンドスクールでさえ、生活指導員の人数を確保するのが大変。今年は発熱で欠席者が出たが、当日新しく生活指導員さんをお願いすることはできないので、そのまま1名足りない状態で行くことにな

った。

(委員B)

- ・プレセカンドスクールは、平成30年に実施地を変更して、今年で2年目になる。以前は宿ごとの距離が2キロくらい離れていて、先生方の目を行き届かせるのが大変だった。5年生のセカンドスクールになって、プレセカンドスクールでもっと生活面をしっかり見ておけば良かったと反省する部分もあった。昨年度からは、徒歩5分くらいで回れるところで分宿をしているので、先生方の目が行き届きやすくなった。
- ・セカンドスクールのためのプレセカンドスクールという部分が大いだが、それだけではない。4年生には4年生なりの学びがあり、成長があると思う。家族と一緒にいけるような観光的な体験では薄いと考える。学校で行くからこそその体験として、現地の学校と交流をしている。それぞれの学校の良さについて話したり、一緒に周辺散策をしたりしている。また、放課後も会って交流できたことが良かった。
- ・現地の方に、観光で行っただけでは分からない話を聞かせていただいた。プレセカンドスクールならではの話を聞くことで、セカンドスクールでも現地の生活を知るのが楽しみになる。ダムに沈んだ町について話を聞くなど、4年生なりの学習効果を狙っていききたい。
- ・分宿は大変だが、一つの宿にぎゅうぎゅうなのも苦しい。一部屋に多くの人数がいると心にゆとりがなくなり、喧嘩が始まったりする。
- ・現地の方々との交流に意味がある。1日だとなんだかよく分からないうちに終わってしまうので、2泊あることが大事。1日目に現地の小学校と交流をして、放課後また会ったり、2日目の朝奥多摩町の児童が登校時に挨拶できる。また、プレセカンドスクールでは現地の教育委員会や観光協会にお世話になった。そういった大人同士の交流も大事だと思う。
- ・現地の方で、生活指導員さんになれる方がいないかなと思うが、学校に事前に来てもらわないといけないのがなかなか難しい。現地で毎年参加してくれる方が核になってくれると良い。

(委員C)

- ・プレセカンドスクールに参加した時の子どもたちの写真を見てきた。どの子どもも不安のない笑顔で写っていた。学校や地域がきちんとしてくれたから、子どもたちは安心して行けたのだと思う。そういう意味では今の段階では課題点が見つからなかったのだが、片品村は結構遠いなとは思った。

(委員D)

- ・今年もプレセカンドスクールに行ってきた。プレセカンドスクールでは、5年生のセカンドスクールへの接続を常に意識している。4年生の事前指導でいかに宿の使い方とか係活動について教えるかが重要。子どもたちは、(宿泊学習について)ゼロからのスタートになるので、前年の写真を見せながらやっている。
- ・授業時数との兼ね合いは難しい。総合的な学習の時間でとることが多いが、他の授業でとることもある。帰ってからの事後指導も、すべて総合的な学習の時間でとることはできない。プレセカンドスクールではできていたことが普通の生活に戻るとできなかつたりして、事後指導では、学校生活にいかにかをいつも課題に感じている。

(委員長) 説明

- ・この検討委員会では、事前学習と事後学習の重要性も提案していくことが必要だろう。
 - (1) 新学習指導要領と長期宿泊体験活動の関連について
 - (2) 今後のセカンドスクールの目的の再確認

(事務局) 説明

- ・今後の会議の流れについて

(副委員長)

- ・この委員会は内容を見直すだけではない使命を持っていると考えている。中身をどうするかだけでなく、プレセカンドスクール、中学校のセカンドスクールがそもそも必要なのかという問題がある。必要なのであれば、なぜ必要なのか必要性を明確にしなければならない。集団生活に慣れていく必要があるから、プレセカンドスクールは必要ということでもいいのか。プレセカンドスクールはセカンドスクールの為のもので良いのか。中学校セカンドスクールが無くなった場合には、他市と同じように移動教室に行って自然体験をすることになるのか。今後も同じ形でセカンドスクールを維持していく必要があるのかを、まず考える必要がある。

(委員長)

- ・それでは改めてセカンドスクールについて、またその意義などについて、ご意見をいただきたい。

(委員A)

- ・このままでよいとは思わないが、自然の中での長期宿泊体験活動は続けるべきだと思う。

(委員E)

- ・中学校も小学校と同様に授業時数を工面するのが大変。セカンドスクール以外にも、進路指導や、地域に絡めた活動もある。総合的な学習の時間の 50 時間の中でやるのは、時間の捻出が難しい。行事を減らすというのも考えられるが、行事も行事で意義があるので縮小しにくい。セカンドスクールに意義はあるが、やり方は検討しないといけない。
- ・中学校のセカンドスクールは、小学校のセカンドスクールと連動したものにしたい。だが、中学校は市内の複数の小学校から入ってくるので、それを連携してやるというのは時間がかかるし難しい。

(委員F)

- ・8年目なので、それより前のことは分からない。『とべ! 緑の教室』ⁱⁱの本にセカンドスクールの目指すところを書いてある。そこから目指すところが変わっていないのであれば、セカンドスクールは続けるべきだ。

(副委員長)

- ・中学校で小学校のセカンドスクールでやったことをもう一度やる必要があるのか。それが、ブラッシュアップできるのであればやるべきだし、小学校でもプレセカンドスクールがないとセカンドスクールができないのであれば、プレセカンドスクールはやるべきだと思う。

(委員G)

- ・中学校のセカンドスクールに何を求めているのか。要綱の目的を小学校で達成できるのであれば、中学校のセカンドは別の形を考えないといけない。
- ・私が武蔵野市に着任した当初は、志賀高原で移動教室を行っていた。それから何年か後になって、セカンドスクールが始まった。また、私が以前勤めた練馬区では、1年生は区の施設で臨海学校、2年生はスキー教室、3年生で修学旅行を行っていた。
- ・今の要綱は『小中学校セカンドスクール実施要綱』となっている。実施要綱の見直しも視野に入れて、(小学校、中学校一緒ではなく、) 中学校では何を指すのかというのを入れると良いのではないか。

(委員B)

- ・小・中学校の連携、武蔵野市民科との関連性が大事だと考えている。武蔵野市民科の中で、セカンドスクールがどういう意味があるのかというのを考えていくと、自ずとプレセカンドスクール、セカンドスクール、中学校セカンドスクールのそれぞれの課題が見えてくるのではないか。
- ・プレセカンドスクールが無かったときのセカンドスクールは大変だったから、プレセカンドスクールは必要。だが、プレセカンドスクールはセカンドスクールの練習という意味だけではなくて、4年生を連れていくことの意味を考えないといけない。

(委員H)

- ・二中は桜野小と境南小から来ていて、桜野小も境南小も稲刈り体験、二中は田植え体験で、(小・中学校で、稲刈り体験と田植え体験を) 両方できる。一方、五中は第五小と関前南小から来ていて、みんな秋にセカンドスクールに行くので、小中ともに稲刈りをやることになる。だが、行事等との関係もあって、(小学校は秋、中学校は春のように) 全学校で同じ時期に行うのは難しいだろう。同じ時期であっても、小学校も中学校も稲刈りであれば、中学校ではコンバインを運転するなどして、小学校と差別化をしていくべき。中学校ではやる中身を1歩ステップアップして、よりよい学びにしてほしい。
- ・泊数については、今は適当であっても、今後変わる必要が出てくるかもしれない。セカンドスクールも以前は7泊だったが、土曜日に学校が休みになったタイミングで、6泊に短くなった。それはその時の状況で判断すれば良いのではないか。
- ・保護者としては、しっかりと、プレセカンドスクール、小学校セカンドスクール、中学校セカンドスクールが必要であるということを念頭に置いて検討をしてほしい。

(委員長)

- ・現在実施しているプレセカンドスクール、セカンドスクールの成果と課題を踏まえ、これらについて国の求めるものや時代の流れに応じて考えていくことが必要になると思う。これまでの委員会の内容を通して、改めて今回の検討の意味が再確認できたように思える。

(委員F)

- ・今はセカンドスクールの時数を、ほぼ総合的な学習の時間で取っている。なぜ総合的な学習の時間で取るようになったのか知りたい。

(委員I)

- ・私が来た時には既に総合的な学習の時間で取るということになっていたので推測にな

るが、セカンドスクールでは様々な体験活動を行っている。それで、学校には年間指導計画というのがあって、そこにはセカンドスクールの体験活動の時数は入っていない。例えば、セカンドスクールを理科に割り当ててやろうとすると、学校でやる学習の時間が削られる形になってしまう。学校での学習活動の質を下げないために、総合的な学習の時間で取ることになったのではないか。

(委員 J)

- ・元々は教科で取っていた。だが、稲刈りをするから社会科なのか、水中生物を見るから理科かというところではない。学年に応じた教科のねらいがあるので、その活動がきちんと指導がなされて、授業としてふさわしいものになっていなければならないが、怪しい部分があった。それを是正しないといけないということで、学校行事や特別活動で取ることも検討したが、教科の枠の外になってしまうので、時数がすごく増えてしまう。総合的な学習というのは、体験をしながら学ぶというものでセカンドスクールを割り当てるのになじみやすく、セカンドスクールは総合的な学習の時間で取ろうという話になった。
- ・(セカンドスクールが始まった当初と) 理念は変わっていないし、教育委員会としては大事にしていきたいと考えている。ただ、新学習指導要領が施行され、教員の働き方改革が言われている中で、セカンドスクールの目指す効果というのを失わずに、どう時代とマッチングしていくのか。やり方や泊数の見直し等を行い、検討していく必要がある。

(委員 B)

- ・検討の対象になったのはセカンドスクールだけではなく、他の行事についても教科としてこじつけて計算していくのはいかなものかという話でなった。それで、見直していく中で、セカンドスクールは総合的な学習の時間と行事で行うことになった。
- ・今、教科の横断的なアプローチというのが新しい学習指導要領の中で言われているので、今回改めて教科でのカウントというのが考えられるようになった。自然を感じるために、教科の切り口から迫っていくことも大切だと考える。

(委員 J)

- ・予定が後ろ倒しになってもかまわないので、セカンドスクールの内容について、次回しっかりと議論をしていきたい。まずは小学校の中身を固めて、それから中学校の方も考えていきたい。小学校が固まらないと、中学校も議論しづらいだろう。
- ・個人的には、小学校のセカンドスクールの泊数について、しっかり考えていく必要があると思う。効果を失わずに中身を充実させるには、5泊では無理なのか、4泊では無理なのか、6泊7日の必要があるのか。具体的にシミュレーションしながら議論していきたい。

(委員長)

- ・それでは、まず小学校セカンドスクールについて、その目指すところの効果を失わずに中身を充実するためには、4泊ではどうなのか、また、5泊ではどうなのか等のシミュレーションをした上でその内容や方法について検討してほしい。中学校も新たな視点でやっていくのであれば、同様に考えてもらいたい。

(委員 J)

- ・セカンドスクールは泊数ありきではないと考えている。教員の負担軽減や、総合的な学

習の時間の時数を圧迫している問題も考えなければいけない。セカンドスクールは、武蔵野市の特色ある教育の第一だし、その効果を大きく失うことはできない。しかし、世の流れというのもあるので、例えば、1泊減らすと時数に少し余裕ができて、総合的な学習の時間の時数を圧迫しているのを少し緩和できる、とかそういうことをぜひ一緒に考えていただきたい。

(委員A)

- ・今年度わが校は、武蔵野市民科のモデル校になっている。そのため、総合的な学習の時間の目的を達成しつつ、セカンドスクールをやるために作ってみたものがある。それを基にして、検討・課題を踏まえた案をいくつか用意はできると思う。

4 事務連絡

- ・次回の日程調整について
- ・実施内容のシミュレーションについて

i プレセカンドスクール実施要綱

第1条(4) 学年ごとの発達段階や子どもたちの実態を踏まえ、セカンドスクールの内容との関連を考慮し、学習効果及び学習意欲を高める。

- ii 『とべ！緑の教室－武蔵野市セカンドスクールの挑戦』小原康子著、株式会社小学館、2001年